

【研究ノート】

ニーチェにおける詩人

——ニーチェの詩の理解のために——

河 内 信 弘

はじめに

ニーチェはかなりの詩を書いたが、詩集としてまとめることはなかった。詩が著作に加えられる「序詩」であったり、また「補遺」であつたりする。「後歌 Nachgesang」であつたり、また「間奏曲 Intermezzo」であつたりする。彼はまた『ツァラトゥストラはかく語りき』を詩と呼ぶ。彼の言うとおりのこの作品を詩として受けとらなければならぬのであろうが、その時おそらくいわゆる詩という概念から理解するなら、大切なもの、ニーチェにとって本質的なものが欠落することになるであらう。

そもそもいわゆる詩という概念も、定義とは言わないまでも、ある程度の枠づけをしてみようとすると、実りある枠づけをもたらすとも思われない。ニーチェにおける詩を理解するためには、そのような作業より、『ツァラトゥストラ』を詩として受けとり、そして、この作品を中心に置いてニーチェが詩、あるいは詩人をどのように考えていた

かを、追ってみるのもひとつの方法に違いない。

しかしこのノートはさらに論ずる範囲をせばめなければならない。つまり『ツァラトゥストラ』を詩として受け取ることが、どのような意味を持っているかは後にして、『ツァラトゥストラ』においてのべられている「詩」あるいは「詩人」の問題を手がかりにして、ニーチェの言う「詩人」を考えてみようと思うのである。

ところで、日本語の「詩人」の問題である。和歌を作る人は歌人であり、俳句を作る人は俳人である。そして詩を作る人が詩人である。歌人、俳人、詩人を含めて詩人とは一般に言わないであろう。しかし、ここで使われる「詩人 Dichter」の語はニーチェに入る前にすでに日本語のいわゆる詩人とは違い、もっと広い意味で使われている。

Dichter : 詩人と深く係わる語をあげておこう。

Dichter : 詩人、作家 dichten : 広義では文学作品、狭義では詩を作ること、 Dichten : 詩作、創作、虚構、作物
Dichtung : 詩歌、文芸作品、(集合的に)文学、創作、フィクション Gedicht : 詩、韻文、詩歌

ちなみに日本語の「詩人」の意は辞典によれば、詩を作る人であり、詩は漢詩、あるいは文学の一部門をさす(広辞苑)。Dichter が広い意味を含むのに対して日本語の「詩人」は限定され、本来拡大されることが少ないのではないかと思われる。

一

「かつて、ツァラトゥストラもすべての背面世界論者と同じように自分の妄想を人間の彼岸へと投じたのであった。世界は悩み、苦しみぬいている神の作品とその頃の私には思えたのである」(Bd. VI, S. 31)とツァラトゥストラは自己を振り返る。それはニーチェ自身が自分の過去を振り返ることでもあった。その過去とは特にショーペンハ

ウアー、ヴァグナーへの傾倒の頃と考えてよいであろう。しかし、傾倒といってもその目は当然のことではあるが対象を介して、自分自身にむけられていた。「哲学体系はそれを作り上げた者にとってのみ完全に正しいのであり、それ以後のすべての哲学者にとっては大抵は偉大なる誤りである」(Bd. III, S. 295)とニーチェは考えていたのである。ニーチェは思想をみていただけでなく、それ以上に哲学者の生きる姿をみていたといえよう。そこからニーチェはニーチェ個有の生き方を見い出そうとしていたであり、そこに自己を写し出していたのである。

『教育者としてのショーペンハウアー』を振りかえって、「自分の内奥の歴史であり、自己の生成を記した」(Bd. VI, S. 318)というのも、そこに深く関連する。「ショーペンハウアーの最初の一ページを読んだだけで、全ページを読み、彼が語るどんな言葉にも耳を傾けるであろうことを知る読者、私はそんな読者のひとりだ。」(Bd. III, S. 342)と述べながら、その思想を具体的に解して述べるのではない。彼の生き方を語るのである。しかもショーペンハウアーを語る時、ニーチェはその生理的感覚を語りさえするのである。たとえば、手入れがゆきとどいた背の高い樹木の林に入って深く息をし、再び元気を取り戻す、そのような感覚でたとえる。また「自然の植物が持つ最も内なる力が他へと流れいく不思議なる流れ」(Bd. III, S. 342)と分析する。ニーチェはそうショーペンハウアーを受け取ったのである。それは比喻とのみ取るわけにいかない。思想的、あるいは表現されたもののみならず、それ以上に人間そのものに影響されたといふべきであろう。そこに人間と自然との結びつきの深さを見るニーチェがあらわれる。さらにそれが感覚的、感性的表現であらわされている。

『教育者としてのショーペンハウアー』はそのタイトルが示しているごとく教育者としてであって、学問的に思想家として扱ってはいない。ショーペンハウアーを紹介しつつ、あるいはその生き方を紹介しつつニーチェは自分の文化の根本思想を述べるのである。おのずとそれが芸術家の役割、当然そのなかに詩人も含まれることになるであろうが、そこにふれてくる。「我々の内外において哲学者、芸術家、聖者を生み出すよう促すこと、それをおして自然の完

成にたずさわること」、「芸術家は自然がどもっていることを推し測り、自然の方へ歩みを進めて迎え入れ、自然がその試みによって本来あらわそうと望んでいることを代わって表現すること」。(Bd. III, S. 378)これがそれである。そして、さらに言う。

「彼ら(真の人間、最早動物を超えたもの、哲学者、芸術家、聖者)の出現によって、彼らの出現をとおして決して飛躍することのない自然が唯一の飛躍を、飲びの飛躍するのである。なぜなら自然が目標に達したとを感じるからである。そこではすなわち目標を立てる必要もなくなり、それまで生と生成というものに実に高い賭けをしたものだということを知るのである。自然はこの認識のおかげで輝き、人間が『美』とよぶおだやかな夕の疲れが自然の顔に宿る。自然がその時この輝く表情で語るものが存在を解くための偉大な啓蒙である。死ななければならぬ人間のぞみうる最高の希望は耳をひらきながら、たえずこの啓蒙に加わることである。」(Bd. III, S. 376)

自然と人間とは異質のものではなく、自然もまた自己を表現する、と考えるロマン主義の自然観の流れをここに読み取ることができよう。⁽¹⁾生命に満ち、美しさと謎に満ちながら自己を表現する自然を、人間もまた生命に満ちて受けとり、そこに「メルヒエン」が生れるのである。しかしその時代はすでに去り、すでにニーチェにとって、「自然が人間から尻ごみし、それどころか無意識の本能に戻ろうとするかのごとく」(Bd. III, S. 374~375)見えるほど人間は荒廃しているのであった。自然は人間にむかって救済と完成を求めて押し寄せるが、人間はそこから離れていく。人間は自然の求めるところから後退していく。そうニーチェの理解するなかにあつて、聖者や哲学者や芸術家が自然を実現し、いわば仲介者となつて、自然の意図するところを人間に伝えるということになる。この仲介者をえて、自然はやすらぐとニーチェは考えている。それが「夕の疲れ」にあらわれるわけである。「自然が口ごもっているということ」、「これを実感として、比喩としてでなく、疑いのない確実な事実としてニーチェが受取っていたと考えなければならぬ。つまり自然は口ごもりつつであるとも、文字通り語るということである。ニーチェを口

マン主義の流れの延長に置くことはそう理解しなければならぬことを意味するであろう。

『悲劇の誕生』にさかのぼるならば、それは一層明らかになるであろう。自然はさらに根源的一者 *Ur-Eine* というものにいわば集約化されている。『ショーペンハウアー』においては自然が口ごもりつつ語るとあったが、さらにその背後に根源的一者が想定されているのである。自然は根源的一者の仮の姿となっている。

全ての現象と存在の背後に潜む、真の存在といえる根源的一者。この一者は永遠に悩める者であり、矛盾に満ち、根源的苦痛に満ちた者なのであり、しかも、時間と空間の因果律のなかで仮象としかあらわれようがない。人間も自然も仮象である。人間も自然も苦渋に満ちたものである。しかし古代ギリシヤに導かれたかのように、原罪の影はない。根源的一者は存在の背面にあるけれど、人間を罰する者ではない。人間や自然が仮象でありながら根源的一者とひとつになりうるものであるとして、その肯定の道がさがされる。

この根源的一者の苦悩、矛盾、苦痛がいかなるものとして仮象のうちにあられ、それらが癒されるか。夢 *Traum* と陶酔 *Rausch* を介しながら、アポロ的なもの、ディオニュソス的なものとしてのあられ方をニーチェは考える。だが、夢と陶酔というものを出発の依りどころとするのはいかにも頼りないと言えよう。そこに人間と自然と、根源的一者との結びつきが失われているというニーチェの理解があると考えなければならぬと思う。⁽³⁾ 同時に『悲劇の誕生』はギリシヤ悲劇の誕生と死と再生を論ずるのだが、特に再生を論ずることの困難が暗示されているかのようである。ニーチェにおける現代から、遠いギリシヤへ遡る糸の、ニーチェのその頃の確信にくらべ、実際の細さを感じないわけにいかない。この著作が、ギリシヤ悲劇を論ずる名著と言うよりもむしろ、芸術論の名著として残ったことはそれを示しているであろう。

ニーチェは抒情詩人を論じて、「まず、ディオニュソスの芸術家として、根源的一者と、そしてその苦痛と矛盾と完全に一つになっている」として、「抒情詩人の『私』は存在の深淵から響きでてくる」と考えるのである。したが

つてこの私はいわゆる經驗的、現実的な人間の自我ではなく、真に存在する永遠の自我、事物の根底の上にたつ自我なのであり、抒情的天才が事物の根底を見抜く自我なのである。(Bd. III, S. 39~41)

このように抒情詩人は根源的一者とひとつになり、その苦痛と矛盾とひとつになって歌う。それによって根源的一者という存在の真実があらわになり、救い出され、癒される。それは人間が、自然と共に救い出されることである。仮象にすぎない人間、シレノスに従えば「一日の種族」が。それは、太陽系のなかでほんのしばらく呼吸したかと思ふと凍結してしまふ星、その星の上に住む死滅せざるをえない人間 (Bd. III, S. 369) が救い出されることでもある。

『ショーペンハウアー』から『悲劇の誕生』へと逆にたどって見たのだが、本来の存在、真の存在とも呼ばれるものが、人間からしだいに遠ざかっていくことが分る。『ショーペンハウアー』においては「自然」、『悲劇の誕生』において「根源的一者」、それから少年時代と遡ってゆけば、神がはっきりと登場するであろう。「自分の妄想を彼岸に投じた」わけである。本来の時間の流れに従えば神、根源的一者・自然そして人間へと、しだいに自己自身に、ニーチェの目の投ずるところが近づいてくる。それは存在の深淵がしだいに自己に近づいてくることもある。

二

無花果の実が木から落ちる。実は熟して甘い。その実の赤い皮がおちながら破れる。北風なのだ、私は、この豊かな無花果にとって。

このように、無花果に似て、この教えは君達に落ちる。さあ、友人達よ、この果汁を、この甘い果肉をくらいたまえ。あたりは秋、澄んだ空。時は午後。見よ、なんとという充実が私達をつつんでいることか。満ちあふれる豊かさのなかから遙かな海をながめることのすばらしさ。

遙かな海をのぞんで、かつて人は神と言った。しかし、今、私は君達に教えた、この時超人と言うべきことを。

(Bd. VI, S. 105)

この美しい文章に接するとき、新約聖書の何ヶ所かに出てくる無花果のたとえを思い出さないわけにはいかない。「その枝のすでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る」、また、イエスは飢えたとき、無花果が実をつけていないのを見て、「『今より後いつまでも果を結ばざれ』と言ひ給へば、無花果の樹たちどころに枯れたり。」(マタイ伝による)と記されている。そこには自然をも枯さんとするイエスと、自然の豊かな実りを待つツァラトゥストラの対比を見出すことができよう。

この美しい文章ではじまる『ツァラトゥストラ』第二部「至福の島々」では「神は臆測である Gott ist eine Mutmaßung」(Bd. VI, S. 105)と述べられるのである。神が存在するとするならば、創造とはあり得なくなる。そして永遠不滅、完全なるものが存在するならば、時間や空間のなかでの生成、発展は仮象となり、虚偽となる。かつて『悲劇の誕生』の頃、根源的一者を想定し、現実の全て、人間も自然も仮象とみたニーチェであるが、それを乗り越えてのべるのである。根源的一者は神と言ってもよいものと今はなっている。「私の作ったこの神はあらゆる神々と同じように人間の作り出したものであり、人間の妄念であった」(Bd. VI, S. 31)のである。そしてその神を論ずる流れのなかで詩人について言及する。

ゲーテ「ファウスト」を結ぶ「一切の移ろうものは／ただ比喩にすぎない」を逆転して、「一切の不滅のものは——ひとつの比喩にすぎない。そして詩人はあまりに嘘をつきすぎる。」(Bd. VI, S. 106)とのべている。

「この嘘をつきすぎる」については後で述べることになるが、ここでは神を論ずる延長上において詩人についてその言及されていることに目を向けておきたい。かつては神が全ての彼岸にある実体そのものであった。詩人はその実

体を伝える役割を果たしていたからこそ、そうニーチェによって理解されたといえよう。

「一切の不滅のものは——ひとつの比喩にすぎない。そして詩人は嘘をつきすぎる」と述べながら、「しかし、時間と生成について最上の比喩が語らなければならない。その比喩はあらゆる移ろいゆくものへの讚美と是認でなければならぬ。」(Bd. VI, S. 106)とされるのである。「最上の比喩が語らなければならない Die besten Gleichnisse sollen reden」とは何を意味するのであろうか、言葉は、本来、比喩であらざるをえないという意味であらうか。そして、最上の比喩とは詩を意味するのか。おそらく「太初に言ありき」の重みが背後にあるであらう。移りゆく時間と、変りゆく生成を、いわば動くことのない言葉ではあらわすことはその性質上不可能であらう。また、それ以前に言葉はそのものを表わすことはできず、事物のメタファー以外にあり得ない⁽⁴⁾。時間と生成が世界の本質なら、そしてそれを表現しようとするなら、なおいっそうメタファーであり比喩であらざるをえない。神を否定し、不滅なるもの否定し、時間と生成こそ世界の本質であると伝えるためには、最高の、最上の比喩でなければならぬとするのであろうか。しかし比喩ではなく比喩がと主語となるのはいかなる意味か。

ともかく、この章が『ツァラトゥストラ』中においても屈指の美しい文章、比喩ではじまるのは象徴的であるかも知れない。「詩人は嘘をつきすぎる」と考えると同時に「詩人」であらざるを得ないニーチェ。

三

「詩人は嘘をつきすぎる」を受けて、第二部後半部に「詩人について」の章がある。

弟子はそのわけを問うのであるが、ツァラトゥストラは自分も詩人のひとりであると答える。ツァラトゥストラが自らをも批判の対象としながら、詩人について述べるところは次のようなものである。

とくにすべての詩人の信じていることは、草地やさびしい山腹に寝そべて耳をそばだてていれば、天と地の間にあるもろもろのことについて、いくばくかを知りうるということだ。

そして感情のこもった興奮がやってくると詩人たちはいつもうぬぼれる、自然がかれらに惚れこんだのだと。

つまり、自然がかれらの耳もとに忍びよって、秘密な事柄や恋慕のことばをささやくのだ、⁽⁵⁾ と思いこむ。そしてそれを万人にむかって誇るのだ。

ああ、天と地の間には、詩人だけが夢に見たと自慢しているようなあまたのことがあるのだ。

とくに天の上、にそれが多い。つまりあらゆる神々は詩人たちの編み出した比喩であり、密輸品なのだ。

まことに、それはわれわれを高みへ引いてゆく——というのは、つまり、雲の国へ引いてゆくのである。その雲の上へわれわれは色さまざまなわれわれのぬけがら、を載せて、それに神々とか超人とかいう名を与えるのだ。——

つまり、これらの神々とか超人とかは、雲の上に載せることができるほどに軽いのだ。

ああ、あっぱれな出来事と見なされようとしているこれらの「不十分なこと」に、なんとわたしは飽き飽きしていることだろう。ああ、なんとわたしは詩人に飽き飽きしていることだろう(5) (手塚富雄訳) (Bd. VI, S. 160~161)

あきらかな詩人否定のごとく思われる。「無花果の実が落ちる」ではじまる引用の最後に超人も登場したが、はやくもそれさえ否定しているかに見える。この『ツァラトゥストラ』が主人公の成長を追う一種の教養小説であること、つまり、この部分がまだ二部後半にあることも考慮する必要があるかもしれない。が、それ以上に自分の心を訪れるもの、生ずるものことごとくを考えぬくことのあかしと考えるべきであろう。

ロマン主義の延長上おくと理解しやすくなる「自然が口ごもっていることを推し測り……」というのも、この批判の対象として読みとることも可能と思われるし、「遙かな海をのぞんで、」神と言うのも、超人と言うのも、この批判

の対象のなかに含まれている。

「私の意見そのものを覚えておくことは、わずらわし過ぎるし、多くの鳥が逃げていった。だが時には私の鳩小屋に、私の見知らぬ鳥が飛んできていたこともある。」(Bd. VI, S. 159) この比喩が示すように、自分の意見であれ、他の考えであれ、ツアラトゥストラニ―チェのなかで考えぬかれている。しかし、この詩人批判が暗示するように、安定した思考の上に全てがうち建てられるのではない。すべてがさらされる。「詩人は嘘をつきすぎる」と言いながら「自分も詩人だ」というツアラトゥストラに、いわば安定はなく、むしろ動揺し、極端から極端へと揺れるのである。時間と空間の背後に詩人の嘘を見出し、「肉体」そのものの時間と空間のなかでの移ろいが全てであると認識したことに、それは深く関係するであろう。

ニーチェの妹の小牧師という言葉を用いるまでもなく、幼少時代は神につつまれ、そこから出発して、神への疑念、知られざる神、根源的一者、自然、肉体と、ニーチェの目は自己自身へと近づいてくる。それはしだいに安定してくることを意味していない。むしろ全く逆であり、深みを増すと同時に、不安定になってくる。深みは深みをましてゆく。過去の体験が、その時の判断がゆれ動き出し、批判の対象となってくる。「幾分かの悦楽と、幾分かの倦怠、それがせいぜい詩人の最上の思索だ。」(Bd. VI, S. 161) と詩人を鋭く批判するのである。

四

『ツアラトゥストラ』は第三部に入ると、前二部にくらべ、表現がゆるやかになってくる。否定がしだいにへってゆき、本来の意味で自分のなかに入ることが多くなってゆく。夢を解くことも多くなり、表現が全体として詩的になってゆく。文字通りの詩もそのなかに加えられてゆく。自分のいわば視界におさめられるもの、自分の思考において

考えられうるものが中心であったが、それがツァラトゥストラがとらえるから、ツァラトゥストラがとらえられるに全体の調子とその根底において変わってくるのである。

あるものが彼を襲い、とらえたのである。それが作品のなかにあらわれてくる。そして驚くべき誠実さで、あるいは自己の感覚のすみずみに至るまでの驚くべき確信を抱いて、それに耐え、自己を能動化してゆく、もちろんその時、ツァラトゥストラはニーチェその人に他ならない。もっともこの自己の感覚への驚くべき確信、信頼は、ひとつの思想に、あるひとつのものに自己をつなぎとめることはしない。彼に生ずるもの、訪れるもの、襲うもの、全てに彼はゆれ動くことになるからである。ひとつのものに安定し、自己をつなぎとめるといふことは、それ以外の他のものから自己を除き、守ることもあろうから。自己への信頼は、自己を寄るべき小舟にしてしまう。ニーチェがヘラクレイトス、ピコタゴラス・エンペドクレスなどに「一種超人的な尊重、いや、ほとんど宗教的畏怖で自分の身を扱った」(Bd. III, S. 252) 態度を見出したが、ニーチェ自身にも自分自身をそう思うものがあつたのではなかつたか。しかし、彼等は自分自身がギリシャの神々を祖先とすることに何も疑いを抱いていないのに対して、ニーチェは自分のなかに「断片と謎と偶然」を発見せざるをえなかつた。そこにあつて「自分自身への信仰」は、用意されたもの、あるいは自分のなかに見い出されるのではなく、「自分で獲得しなくてはならない」のであつて、「自分のなかに巢食う懷疑家」との戦いであつた。(Bd. V, S. 207)

すこし先を急ぎすぎってしまったが、二部の終りに近く「救済について」で詩人がこれまでになく肯定的に述べられている。

ツァラトゥストラは詩人か、それとも正直者か。解放者か、それとも压制者か。善人か、それとも悪人か。

私は未来の断片としての人間のなかを歩いている。私の心に映るあの未来の断片としての人間のなかを。

そして、断片であり、謎であり、残酷な偶然にすぎないものをひとつのものに凝集し、総合すること、それが私の創作であり努力の全てである。

人間が詩人でもなく、謎を解く者でもなく、偶然を救済する者でないとしたら、私が人間であることにどう耐えたらよいというのか。(Bd. VI, S. 175)

「詩人か、それとも正直者か」における詩人は「嘘をつきすぎる」を受けて使われていると思われるが、後の引用の詩人は「表面的な者」でも「浅い海」でもなく、深く底にまで沈みうる者と考えてよいであろう。

ところで、第三部「新旧の板について」において、詩人が再度取り上げられる。三部になると、以前とは違うリズムがあらわれると指摘したけれど、それ以前は、「懺悔をすすめる説教師のように、また狂人のように、彼等の一切の偉大さと小ささに私は怒り、嘆いたのであった」(Bd. VI, S. 243) ことの結果であることもあきらかになる。そのしばらくあとに、「私は比喻で語り、詩人のようにびっこをひき、どもる。そして、私がいまだに詩人であらざるをえないことをまったく私は恥じている」とある。しかしながらも「詩人でもなく、謎を解く者でもなく……」を凝集して、ツアラトウストラの努力 *mein Dichten und Trachten* が人間において断片であり、謎であり、怖ろしい偶然であるものをひとつにし *dichten*、総括することであり、「詩人 *Dichter* として、謎を解く者として、偶然から救い出す者として、私は彼等に未来の創造にたずさわるべきことを、そして、かつてあったものすべてを創造によって救済すべきことを教えた。」(Bd. VI, S. 244~245) とある。*dichten* は過去と現在にむけられ、*Dichter* は未来をも含んでいる。詩人と謎を解くもの、偶然から救い出す者とは分ちがたく結びついている。その意味では「詩人としてのツアラトウストラ」あるいは「詩人としてのニーチェ」は意味がなくなるというべきかも知れない。

ニーチェにとって、詩は詩であればよい、あるいは詩は詩でなければならぬ、ということではなかった。ヨーロッパ

パの精神史にあって詩は詩であればよいというのは、人間が自分で自分を引き受けることを意味するであろう。⁽⁶⁾ 神を讃え、神と人をつなぐものではなく、詩は詩であり、詩人は詩人であると自己を自己として引き受けることになる。ニーチェは生成と発展のなかに自己をみながら、そのまま自己を肯定することはできなかった。存在に罪(原罪)を見ることはなかったが、苦痛をみていたし、常に負を背負っているものとしてみていたのである。負はそのまま正に転ずることはなかった。負は超えなければならぬものであった。その時負を正に転ずるものはやはり彼方にあつた。神のごとく外部にあって全てを絶対的必然性のなかに定めるものではなかったが、やはり彼方にあるといわざるを得ない。ツァラトゥストラの民衆への最初の言葉は「私は君達に超人を教える。人間は超克されなければならぬ何かである。君達は人間を超えるために何をしたのであつたか」(Bd. VI, S. 8)であつた。

生成と発展とそして消滅、断片と謎と偶然、それをひとつにして必然に転ずる。ニーチェにとってそれが自分の求める根本のものであつたといえよう。「あらゆる消滅と没落を私達は不満の念を抱きながらなめる、しばしばその底においてあり得ないことを経験しているかのような奇妙な思いを抱きながら。一本の高い木が倒れれば不愉快になるし、山が崩れれば苦痛を感じる」ニーチェであつた。そして「『人間』という概念を美しく後世に伝えるために、かつてあつたものは、永遠に存在しなくてはならない。」「偉大なるものは永遠でなければならぬ」(Bd. III, S. 250)と信ずる若いニーチェの要請が心の底に深く流れ続けていることを感じないわけにはいかない。

詩人と謎を解く者と偶然を救い出すもの、これらは深く結びあい、別々に分けて考えることのできないものである。

五

太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、

成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

福音書のなかで最も哲学的なヨハネ伝福音書の最初である。さて、言葉に対するこの見方はヨーロッパの精神史にいかなる影響を与えてきたのだろうか。

このような最上段にふりかぶるような問をたててみたのは、私達が「言霊」という思想を持っていたにしても、無あるは空という思想を血肉化した歴史のなかにいる故なのである。無あるいは空とは、と問うてみれば、それが空虚で、荒涼としてなにもないということは意味してはいない。無とか空は、私の手にあまることを知りつつも思い切つて言うなら、ある絶対的価値規準の否定である。無とか空の思想の奥行きは深い。それは人間の存在、世界の存在の奥行きへの限りなき深さに違いない。そしてそれを直感し、そこに言葉を与えることの不可能であることを、無と空は、また示しているであらう。

こう考えてみるなら、「太初に言あり……」は逆に全ては必ず言葉となるという思想ではないのかと思うのである。全ての根底に有を見、その有は必ず言葉となるという思想である。真理は必ず言葉になる、言葉にならなければ真理ではない、という思想になるのではなからうか。

ニーチェが詩人というとき、そこになんともいえない苦渋がつきまとっている。どうしても比喩で語らなければならぬ苦渋である。もちろんそこには自在に比喩をあやつる喜びもある。第四部も後半、『ツァラトゥストラ』を閉じるのにあと五章を残すにすぎなくなった「憂愁の歌」のなかで

真理の求婚者だと？ おまえが？

いいや！ 詩人にすぎぬ！

一匹の獣、狡猾に、奪いとり、忍びあしの

嘘をつかねばならず

嘘と知りつつも、すすんで嘘をつかねばならず

獲物がほしくてならぬ

いろとりどりの仮面をかぶり

自分が自分の仮面

自分が自分の獲物

それが——真理の求婚者だと？

いいや！ 道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！

いろとりどりのことを語るにすぎぬ

道化の仮面のうしろからいろとりどりの声をあげ

偽りの言葉の橋を

いろとりどりの虹の橋を渡りながら

まやかしの天と

まやかしの地と

あちこちさすらい、あちこちただよい——

道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！

(Bd. VI, S. 367~368)

と比喩をあやつりながら苦渋に満ちて歌う。ヴーグナーとも理解される魔術師が歌う設定であるが、ニーチェ自身の苦渋に他ならない。後に『ディオニュソス讃歌』の最初を飾るのは、『ツアラトウストラ』における詩と異動があるものの、引用部(異動なし)を第二節とする「道化にすぎぬ! 詩人にすぎぬ」なのである。

抒情詩人の「私」は存在の深淵から響きでてくるとニーチェはいったが、存在の深淵の奥に根源的一者も自然も失せ、自分自身が深淵となって、そこから語り、歌うことになる。自己を信んずることは、自己の懐疑家と戦うことであり、自分自身と戦うことであった。「怪物と闘うものは自分か怪物とならぬよう気をつけなければならぬ。おまえが長く深淵見つめていると、深淵もおまえを見つめる」(Bd. VI, S. 98) こうして深淵はますます奇怪なものに変じてゆく。しかし、ニーチェはそこからどんなことをしても、思想を、言葉をひき出そうとし、そこから与えられた言葉を受け入れようとするのである。

出てこい、深淵の思想よ、私の深みから……

……………

おまえの耳の鎖を解くのだ! 聞け! なぜなら私はおまえの言うことを聞きたいのである。……

動いている、身を伸ばしている、おまえは喉を鳴しているのか? 起きろ、起きるのだ。喉を鳴してはならぬ

——私にはっきり言わねばならぬ。……

……………

ありがたい! おまえが来る——おまえの声がある! 私の深淵が語る、私の最も深きものに、私は光をあてたのだ。

ありがたい! さあ来い! 手を伸ばせ——あっ! 放せ! 吐きけ、吐きけが、吐きけがする——哀しやな。

「快癒しつつある者」の一章からであるが、言葉としてあらわれよとする「私の最も深きもの」と、それを迎え入れようとする「私」との葛藤と読むことができるであろう。だが両者はそこでひとつにはならず、途切れてしまう。「吐きけ」がそれを示すのだが、まことに興味深いことに、このぎりぎりのところにおいて他者の介在によって途切れるのである。他者といっても、「人間への嫌悪」であり言葉を変えれば「同情」としてニーチェの心において係わるものである。そのような形であれ「共同体への渴望」はニーチェにとって非常に強かったと思わざるを得ない。⁽⁷⁾

結局「私の最も深きもの」は言葉にならなかったわけである。しかし、この深淵の思想をツァラトゥストラを取り囲む動物達が代って語ることになる。「万物は行き、万物は帰って来る」。この思想を聞いたツァラトゥストラは皮肉をこめて「おお おまえたち道化師よ、手回しオルガンよ」と動物達に言う。この思想すら、それを口にする動物達への皮肉のかたちをとって、早くも批判され、さらされていると見ることができないのではないのか。そして『ツァラトゥストラ』のあと、ニーチェが振り返って歌う『ディオニュソス讃歌』のうち「猛禽のあいだにあって」の次の一節が最早感じられるのではないだろうか。

ああ、ツァラトゥストラ

.....

いまは――

おまえ自身に追われて、

おまえの獲物、

おまえ自身に射ぬかれて……

……………

おのれを知る者

おのれの首を括る者

……………

いまは

二つの虚無のあいだに

からだをまげている

ひとつの疑問符

……………

(Bd. VI, S. 398~340)

ニーチェは絶えず揺れ動き、脱皮し、快癒し、途上にある人と言えるに違いない。絶えず生れつづける疑問とその解決、その根本は存在そのものを肯定し、思想的に述べることであったであろうが、それらにゆられ、快癒し、また苦悩し、また快癒し、苦悩する、その連続ではなかったか。そして、その歩みの激しさを思わざるをえない。

快癒しつつある者は歌うがよい、健康な者は語るがよい。(Bd. VI, S. 271)

ニーチェにとって詩とは、ニーチェという深淵から浮んでくる快癒のリズムでもあったかも知れない。ニーチェが

あるものに触れえたと思うとき、比喩を持って生れでてくるもの、しかし、どうしても、言葉そのものにならなかつたもの、それをニーチェは追いつけていたと思われる。

テキスト Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, hrsg. von G. Colli und M. Montinari, Walter de Gruyter. 222
よりの引用は巻数とページ数を本文中に示した。

参考文献

- 『ツアラトウストラ』(吉沢傳三郎訳 ニーチェ全集第9巻、理想社 昭和四十六年)
『ツアラトウストラ』(手塚富雄訳 中央公論社 昭和四十八年)
『ツアラトウストラこう語った』(蘭田宗人訳 ニーチェ全集第II期第一巻 白水社 一九八二年)
特に理想版ニーチェ全集の膨大な註には大變御世話になった。
『ニーチェ』(藤田健治 中央公論社 昭和五十三年)
「詩におけるニーチェ」(手塚富雄『心』昭和五十年十一月所収)
「ニーチェ『ツアラトウストラ』の研究」(蘭田宗人 大阪市立大学「人文研究」一九六八年―七二年)

註

- (1) 『ニーチェ』(藤田健治著 二十三頁―三十一頁)
(2) 夕日をめぐる描写をいくつか考えてみることは興味深いイメージを提供してくれるように思われる、たとえばこの『ツアラトウストラ』においても美しい表現がある。(Bd. VI 1, S. 245)
……沈むとき、くみつくせない豊かさから、太陽は海に黄金をふりそそぐ。
——こうして最も貧しい漁師といえども、黄金の權をこぐ。かつてこれを見て、いつまでも涙をおさえることができなかった——

(3) 『教育者としてのショーペンハウアー』特に第七章参照。

- (4) ニーチェの若い頃の言語観は『道徳外の意味における真理と虚偽について』(Bd. III 2. S. 367~384)
- (5) 『ツアラトウストラ』(手塚富雄訳 中央公論社 昭和四十八年)二〇四頁。
- (6) 『ゲオルゲとリルケの研究上』(手塚富雄著作集第三卷 中央公論社 昭和五十六年)第二章参照。
- (7) この点に関しては詩を論ずるためにも十分考慮しなければならないと思われるが、今はその余裕がない。E. Bertram „Nietzsche“ における「エレウシス」の章は十分考えなければならないし、ニーチェ理解に欠くことができな
 らないと思われる。